



から」。人に不快感を与えない所作やしつけなど、「心」を大切に同校の教育は、グローバルな人材づくりの土台になるものだ。また同様に、食事を通してマナーや伝統食、食物の自給率などを考える「食育」も、日本を学ぶ良い機会だ。「アメリカのランチはもっと単純なお料理なので、『こんなおいしい食事が学校で出るんだ』と驚きました」と、これも海外育ちの彼女にとって、かなりインパクトのある学びになった。「この驚きは日本で育った友達にはわかってもらえないのですけれども、両方をいろいろ比べられるのはいいなと思っています」

いよいよ受験の年。平田さんは「勉強と部活を両立しながら頑張ります」と力強く笑う。志望する大学も、すでに絞られてきた。「留学制度のある大学が希望です。日本語と英語だけでなく、ほかの言語も学んでみたい。そして、いつかはアメリカで働きたい」。直近の目標は、2020年に東京で開催されるオリンピックだ。「海外から訪れた人を案内したり、日本文化を伝えたりしたいです」と平田さんは言う。アメリカにいた時、学校のインターナショナルデーで日本の折り紙を紹介したら、友達がみな日本の文化を喜んでくれた。今ならもっとたくさんの方が伝えられるはず。アメリカで生まれ育ち、日本で暮らす彼女だからこそ見える両国の良さがあるのだ。「数学の授業で、先生が『数学は、ただ問題を解くだけでなく、答えを導くまでにいろいろ考えることが大事』とおっしゃったことが印象に残っています」と平田さん。両国の文化の違いに戸惑いはあっても、同校での学びから導き出される解は、彼女の未来を明るく照らしている。



アメリカ在住当時の平田彩子さん



母体となる共立女子学園は、明治19年の設立。当時としては画期的な「女性の社会的自立」を理念に、現在までその実績を積み上げてきた。緑豊かな八王子に第二高校が開校して40年。恵まれた教育環境の中で、生徒たちは、伸びやかに、そして力強く、人間味あふれる魅力的な女性へと成長していく。

充実した教育環境の中で、人間的な魅力溢れる「自立した女性」を育てる。



共立女子第二中学校高等学校

「食育」管理栄養士の指導のもと行う



この春、高校3年生に進級した平田彩子さんは、アメリカのワシントンD.C.で生まれ、小学校4年生までを過ごした。帰国していちばん苦労したのは言葉。日常会話は問題がなくても、学校の授業では聞いたことのない言葉や、見たことのない漢字がいろいろと出てきたそうだ。こうした言葉の壁が、中高一貫の学校を受験しようと考えた理由の一つにもなった。

魅力的だったそうだ。入学後はもちろんテニス部に入った。当初は「テニスは個人競技なのに、どうしてみんながまとまっているんだろう」と戸惑いもあった。でも、一緒に活動するうちにその大切さをだんだん理解し、今はもう最終学年として後輩に指導する立場に。「礼儀を大切にすることを、先輩の私たちがまず自覚しないと」と自らも厳しい目を向ける。もうすぐ最後の団体戦。出場に向けて日々の練習にも力が入る。